

大兼久ストーリーブック
おばーとおじーのしま語り



Ver. 1.0

やんばる国立公園インタープリテーション全体計画【大宜味村編】

目次

このストーリーブックについて P01

大兼久ってどこにある？ P04

大兼久のしま語り P05

大兼久のおばーとおじーの紹介

ストーリー1【自然に抱かれた大兼久】

ストーリー2【暮らしを豊かにした漁業】

ストーリー3【日々の暮らし】

ストーリー4【長寿の村】

おばーとおじーが大兼久で語り継ぎたいこと P18

こうして広がった大兼久v P19

地域の情報リスト P20

あとがき P21



このストーリーブックについて

このストーリーブックは、大宜味村大兼久エリアの魅力や価値を整理し、地域を来訪する方と共有することを目的として作りました。

来訪者を受け入れ、地域の価値を伝えていく側の方々（行政やビジターセンター、エコツアーガイド、宿泊施設や飲食店・土産物店などの観光事業者、地域住民の皆さん）に向けて、ツアープログラムや配布物の作成、商品開発等を行う際に、地域の自然や歴史文化などの伝え方のベースとして活用していただくことを想定しています。

また、観光関連の人材育成や若い世代、移住を希望する人などに向けて、地域を理解し学ぶ教材としても活用できます。



地域を訪れる方にとっては、この地域ならではの魅力や価値をより深く知り、味わうためのきっかけとして使っていただければと思います。

自然環境を含めた地域の状況も来訪者層も年々変化しますので、このストーリーブックに完成版はありません。地域の皆様が主体となって、情報を更新・改訂し、進化させていくことを計画しています。

このストーリーブックについて

ストーリーブックの作り方



POINT
01

地域の皆さんと つくる

地域の皆さんに集まっていただき、3回のワークショップやゆんたくで、数多くの思い出話や地域の魅力、価値について多様な視点でお話を伺ったり、意見を出し合いました。



POINT
02

ストーリーを つくる

ゆんたくやワークショップの話から浮かび上がったストーリーを抽出し、主題となる文とその解説文を、過度に専門的にならないよう平易な言葉で整理しました。



POINT
03

ストーリーブックを つくる

ワークショップ参加者の中から、有志の皆さんの協力をいただき、「大兼久地域チーム」としてストーリーの練り直しを行い、ストーリーブックの構成や内容を考えました。

「インタープリテーション」と「インタープリテーション全体計画」

本書は、「やんばる国立公園インタープリテーション全体計画」の一部として作成しました。

インタープリテーションとは、自然・歴史・文化・暮らしなど、その地域が本来もつ“意味”や“価値”を来訪者と共有し、理解を深めるためのコミュニケーション手法です。

インタープリテーションは地域が持つストーリーを浮かび上げらせ、来訪者自身の価値観や経験と結びつけながら、体験を通して驚きや共感、気づきを与えます。これは、地域の魅力をより深く伝えるための「体験のデザイン」です。そして、地域を伝える様々な媒体（ガイドプログラム、案内板や配布物、インターネット上の情報やお土産物など）を作る際に、伝えるべきテーマやストーリーを整理し、包括的にまとめた「伝え方の設計図」がインタープリテーション全体計画です。

このストーリーブックのほかに、やんばる全体編、国頭村編、東村編のストーリーブックも作成しています。

ぜひ合わせてご活用ください。



各編の最新版は
コチラよりダウンロードできます。



やんばる
全体編

人と自然がつなぐやんばる未来日記

やんばる3村全域に共通する自然と文化の価値・魅力を集めたストーリーブックです。



国頭村
編

見上げれば神宿る山 麓に息づく辺戸の暮らし

辺戸周辺エリアの魅力、特に琉球創世神話につながる祈りの文化と歴史を深掘りできるストーリーブックです。



大宜味村
編

おばーとおじーのしま語り

大兼久集落の魅力、特に人のつながりの生き生きとした豊かさを味わうことができるストーリーブックです。



東村
編

今日もアガリティーダ日和 ～あたりまえが宝物～

東村の魅力、特に人の暮らし、産業の歴史が自然とともにあることを感じられるストーリーブックです。

大兼久ってどこにある？

沖縄島北部、やんばる地域にある大宜味村。その役場が置かれ、村の中心にありながらも海と山が背中合わせのこぢんまりとした集落が大兼久です。

この地域はもともと字大宜味の中の小字でしたが、1931(昭和6)年に字が分かれて大兼久ができました。そのため、今でも大宜味と共通で行われる行事が多くあります。

昔から、大兼久の集落の前はきれいな砂浜が広がっていました。「兼久(ハニク)」とは砂地という意味で、砂が寄せて浜が広がるにつれて、やがて植物が生え、海沿いにも家や畑が作られるようになりました。



過去



※1921(大正10)年

現在



※2026年

大兼久のしま語り

大兼久のおばーとおじーの紹介

はいたい！
わんねーウシおばー
やいびーん



ウシおばー

はいさい！
わんやカマルー
おじーやん



カマルーおじー



今から大兼久の話をするよー聞いてねー

ゆたしく、うにげーさびら

(よろしくお願いします)

ストーリー 1

自然に抱かれた大兼久

1-1

山と川と海が互いに近い大兼久では、
川が水場となり、自然のリズムに寄り添いながら
自給的な暮らしが営まれて来ました。

ここには山と川と海があり
それぞれの神様たちが
いるんだよ



ロープの後ろは
聖域で立ち入り
禁止！



川に行く時は
手を合わせて「うーとーとー」と
神様においのりをしてから
水を使わせてもらったんだよ



お宮の横は、大宜味と
大兼久で年に2回、
縄張りをしています

大兼久川

大兼久と大宜味の集落の間を流れる大兼久川には、小さな滝や、水がたまる場所「クムイ」があります。水道のない時代、そこは暮らしに欠かせない水源でした。

クムイは上流側の1番から下流側の4番まであり、洗濯は4番グムイ、飲み水は3番グムイ。川沿いに拝所があり、山や川の神に手を合わせました。拝所の前にある小さな石のステージは、川から海に向かって祈る場所。海、川、山の自然を繋いで祈る、心の拠り所でもあります。

子どもたちの遊び

昔の子どもたちは3番グンムイまで行って飛び込んで遊んだものです。川を挟んで、大兼久と大宜味の子どもたち同士がチャンバラしたり、アダンの実を投げ合ったり。川にはテナガエビ(タナガー)やモクズガニ(ウルガイ)、ウナギがいて、とてもきれいな水でした。ここから水が引かれた田んぼには、小さいタウナギ(トナージャー)や闘魚もいました。

モクズガニは秋から冬、産卵のために国道を渡って浜まで降りる様子が見られましたが、上流の砂防ダムができてから減っていったようです。



子どもの頃はよく
川や海へ飛び込んで遊んだねえ
タナガーをつかまえて
たき火をして食べたりしたよ



山の恵み

平地が狭い大兼久では、畑に作物ができない時期には山へ食べ物をとりに行きました。椎の実、野苺(イチチビ)、シークワサー、ツルグミ、クワの実、キノコ(ナバ、特に松の木のナバは美味しい)、シャリンバイ(テーチ)、ギーマ…雨の後に出てくるイシクラゲもよく食べました。

山の中には赤くて美味しそうな実がありますが、鳥が食べていない実は毒の危険があるので食べません。

イノーの恵み

イノーとは、サンゴ礁に囲まれた浅瀬のこと。初夏、サンゴの産卵で海が赤く染まります。昔はそれが何だかわからず、その日はイノーに入りませんでした。サンゴが多かった頃は本当に一面真っ赤でした。

イノーには食べるものがたくさんありました。子どもたちもイノーに行き、ウニやシャコガイ、モズクなど、生でも食べられるものをおやつ代わりに取りました。サンゴや海藻・海草が豊かに育つおかげで魚も多く、釣り糸を垂らせばすぐに釣れるほどでした。

イノーで採れるもの

- イバラノリ(モーイ): モーイ豆腐に
- オゴノリ(スーナ): あえ物などに
- モズク(スヌイ): 酢の物、天ぷらなどに
- マガキガイ(ティジャラー、ティザライナ)
- ヒメジャコガイ(アジケー)
- ワモンダコ(島ダコ)
- ウデナガカクレダコ(シガヤー)
- シラヒゲウニ(ガシシ)
- ミズン(ミジュン)
- キビナゴ(スルルーグラー)



ウニをとって食べるのは
子どものおやつだったよー
でも食べすぎるとおこなをこわすから
気をつけなさいよー



ストーリー 2

暮らしを豊かにした漁業

2-1

命あふれる海の恵みは、
漁法の発展と魚を各地へ売り歩くことで
集落に経済的な豊かさをもたらしました。

むかしむかし、
糸満から魚を取る方法を教わって
大兼久の男たちは
みーんな海人(ウミンチュ)に
なったんだよ!



大兼久の漁業の歴史

海に面した大兼久は、背後の山が迫り、畑にできる土地は少ししかありません。そのため、明治の半ばまでは「ハニクフクター」(兼久のぼろまとい)と言われるほど貧しい集落でした。目の前の海で行うのは小さな船の潜り漁かイノー(サンゴ礁の浅瀬)の潮干狩りで、まともな漁法を知りませんでした。その頃、糸満ではアギエと呼ばれる追い込み漁が行われ、大兼久の海まで来て魚をすることがありました。その儲けの様子は大兼久の人々にとって羨ましかったことでしょう。

1897(明治30)年、大兼久の一人の青年が糸満漁師の元へ向かいます。山川桃太です。数年後、漁法を身につけて故郷に戻ってきた彼は、何とか仲間とお金を集めて船や網を整え、数十名の「組」と呼ばれるチームを作り、グルクン(タカサゴ)の追い込み漁を始めました。漁場は本部半島や伊平屋島、与論島に及び、冬の北風で海が荒れる時は、船を塩屋から陸に上げてかついで山を越え、東村まで渡って東海岸へ出漁しました。



※1978年の海/国土地理院ウェブサイトの空中写真を元に加工して作成
<https://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>

漁業を支えた女性たち

魚を獲るのは男たち、売るのは女たちの仕事です。船が浜に戻ると、女たちはティルという背負い籠に魚を入れ、「ユーホンソーリー」(魚を買ってください)と声を上げながら南や北の集落へ売りに行きました。冬に東海岸で漁をした時は女たちも山を越え、東村から名護までも売り歩いたそうです。これは、糸満の女たちの魚売りと比べてもずっと広い範囲でした。この頃から大兼久は近隣の集落よりも豊かになり、他の集落の土地を買って畑を増やしたり、子どもの教育などにもお金を使えるようになりました。

むかし、とれた魚は女たちが
となり村や名護まで売りに行ったんだよ
歩いて行ったんだから
たいへんだったねえ



ユー(魚)
ホンソーリ
(買いませんか)



イマユー
(旬の魚)
アインドー
(ありますよー)

大兼久の女たちはしっかり者だよ
ここだけの話、海人のおじーは酒飲みて
しょっちゅうケンカもしていたから
女たちはそれがイヤで
やっぱりシマ酒で気晴らししたもんさ



こうして大兼久の男たちのほとんどは海人になり、女たちのほとんどは魚売りになりました。大正時代にはカツオ漁が行われ、追い込み漁でも鹿児島や長崎の五島まで遠征したり、昭和初期には南洋へ渡った海人もいました。

ストーリー 3

日々の暮らし

3-1

海と山に挟まれた小さな土地の大兼久では、畑だけでなく、山や海の恵みとそれらを巧みに利用する暮らしの知恵が人々の食を支えました。



普段の食事

昔の主食は芋(芋、さつまいも)、それに島豆腐と野菜、魚が定番です。おばーが普段の食事で作る料理は、地元でとれた野菜たっぷりの味噌汁でした。朝に作って、昼と夜にも具を足しながら「あちらせて(煮立たせて)」、「あちこー(熱々)」になるよう火を入れて、くたくたになった野菜から滋養たっぷりの味が生まれます。こうすることで、サラダで食べるより何倍もの量の野菜を食べることができました。

困った時のソテツ

ソテツの実には毒がありますが、食に困ったときは水につけて腐らせ、毒抜きをしてデンプンを取り出して食べました。主食のような扱いで、塩をつけて食べました。実だけでなく、幹の真ん中の本体からもデンプンを取りました。

3-2

かつてはどの家でも芭蕉布を織り、畑で野菜を作り、シークワサーを実らせ、必要なものは自分たちで作り出してきました。その手仕事や自給自足的な暮らしの記憶は今もこの地に残り続けています。

おばーもむかしは家で芭蕉布を織っていたよ
芭蕉布は、シークワサーであらうんだよ
いい香りがついてきれいになるよ

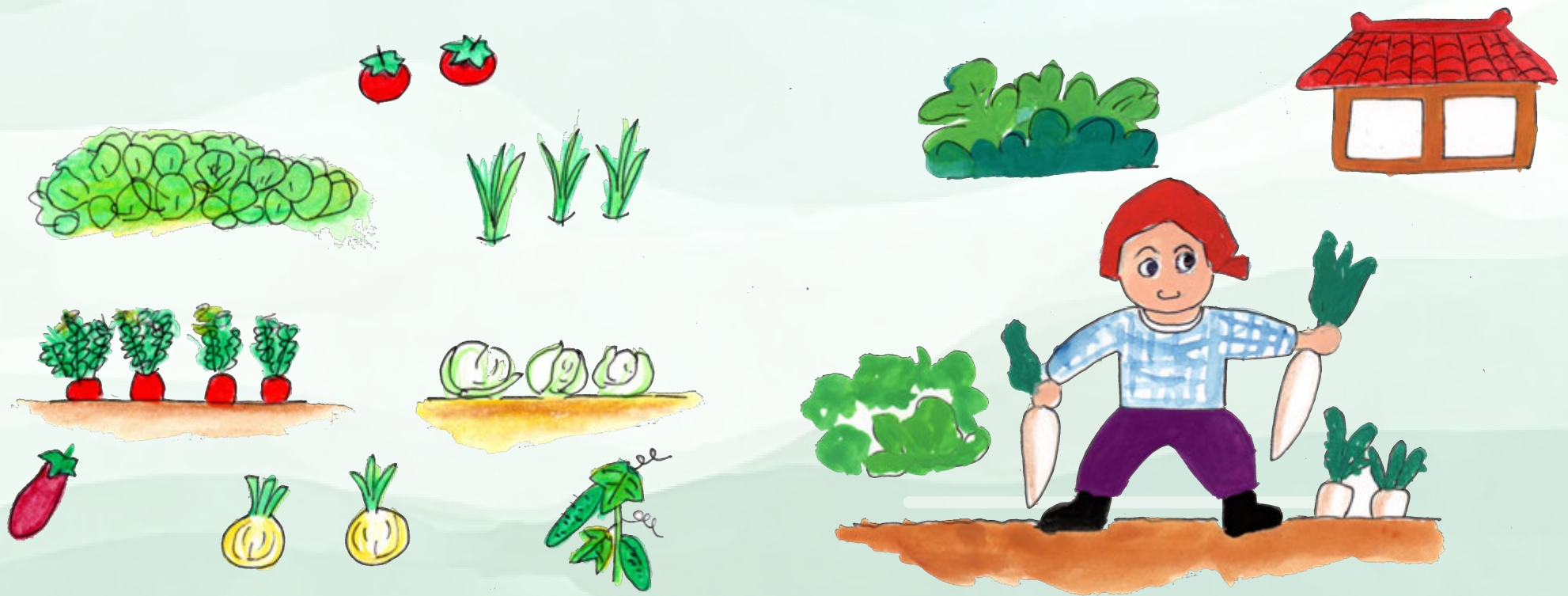


芭蕉布

昔はどの家でも芭蕉布を織っていました。綿布は買わなければならないものでしたが、芭蕉なら畑に生えています。お金がなくても、自分たちで材料から作れる布が芭蕉布だったのです。

その芭蕉布を洗うのには、シークワサーを使いました。これは汚れ落としではなく、くたびれた布を再生させるためだそうです。たらいに青いシークワサーを絞って水を加え、芭蕉布をしばらく浸します。そしてやさしく揉み洗い。ごしごしはしません。その後水ですすぎ、たたんでタオルで包んで脱水し、乾かします。まだ湿り気が残る程度で布を引き伸ばし、形を整えていきます。作業の間はよい香りで一杯です。

芭蕉布は今では高級品ですが、昔は日常の着物でした。それでも手間のかかる大事な生地なので、各家に伝わる芭蕉布はとても大事にされ、現代風にシャツなどにリフォームされたりもしています。



あったいぐわー（畑仕事）

基本は自給自足だった大兼久。昔はほとんどの畑で主食の芋を育てていました。大変だったのは戦時中です。昼は敵に見つからないよう山に隠れてしのぎ、夜になると里へ下りて畑で芋を探しました。

今は主食がお米になり、お店で手軽に手に入るようになったので、芋をそれほど育てる必要がなくなりました。それでも畑仕事はみんなの生き甲斐。ゴーヤー（苦瓜）やナーベラー（へちま）、シブイ（冬瓜）、パパヤー（パパイヤ）、ハンドマ（水前寺菜）、インガナ（ニガナ、ホソバワダン）などの島野菜はもちろん、トマトやキュウリ、採れたてが美味しいサニーレタスのような葉野菜を作る家も多くなってきたようです。



3-3

子どもが産まれれば皆で喜び、
作業を手伝い、余った野菜を届け合う。
小さな集落で誰もが顔見知りの共同体には、
かつての共同売店や公民館を中心に、
温かな人のつながりが今も息づいています。

ここでゆんたくしていれば
村のことなら何でも
わかったさーね



集落で唯一の
共同売店は、村のみんなが
集まる場所さー



食用油とか、缶詰とか、自分で
作れないものはここに頼んで
買っていたんだよ



とにかく
野菜や魚以外は何でも
売っていたよ



共同売店

地域の人々が出資しあって作られる共同売店は、集落の中で唯一のお店。人とものが行き交う場所です。自給自足が基本で、車で買い物に行ったりしない時代、必要な生活用品は、売店に頼んで取り寄せてもらいました。よそへ勉強や働きに村を出ていった子や孫たちに島のものを送るのも売店からでした。人が集まる売店の前でおしゃべり（ユンタク）していれば、地域のニュースなら何でも、どこでヤギや豚の子どもが生まれたかまでわかったそうです。

時代のニーズの変化により、今は大兼久の共同売店は閉まっています。いずれ、地域の新しい交流の場として復活させることができれば良いですね。

ゆいまーる

「ゆいまーる」という言葉は、最近は「分かち合い・助け合い」のような意味で使われますが、本来の「ゆいまーる」は田植えやキビ刈り、家を建てるときなど、人手が必要な時に、親戚や集落の人同士が労働力としてお互いに共同作業をすることです。小さな集落ではこの関係が不可欠で、それによりお互いの結束力も固くなりました。



田植え、キビ刈り、
大変な仕事はみんなで
手伝い合うのが「ゆいまーる」
そうしないと
くらしにくいからねえ

みんなで集まって
笑いが絶えないのが
大兼久だよ



小さな村だからみんな知り合いさー
門(じょう)で村の仕事や行事を分担して
大兼久の人たちはナカが良いよ



3つの門(じょう)

大兼久には3つの門と呼ばれる分けがあります。集落の中にある道を境目にして東から東門(あがりんじょう)、中門(なはんじょう)、南門(みーじまんじょう)[※]といます。各門の前の道や海岸は、それぞれの門の人が掃除をします。

5月のハーリー船競争のときは、門ごとに競争が行われました。若手がいなかったりして漕ぎ手が足りないときは、他の門から人を借りたり、中南部に行った若者がこの日のために帰ってきたり。競争の後は門に関係なく公民館に集まって、仲良く反省会という名の宴会です。

※昔の地図では新島門と表記

ストーリー 4

長寿の村

4-1

ブルーゾーンにも取り上げられた
この地の長寿を支えて来たのは、
毎日の畑仕事。

体を動かし、そこで採れた野菜を
たっぷりと食べ、シマ酒（泡盛）で
心をほぐし、おおらかに暮らして来た
日々のあり方そのものです。



くらしからはじまる長寿

昔の暮らしは、魚を獲ったりそれを売りに行ったり、畑仕事をしたり。とにかく体をよく動かしました。食事は芋と魚と豆腐と野菜。現代から見ると質素ですが、タンパク質もあり、栄養のバランスは良かったのかも。夜、一日の終わりにはシマ酒（泡盛）を飲むのが何よりの楽しみ。女たちもヨミギ（フーチバー）やヤマモモ（ヤマムム）などを漬けた酒を作って、みんなで楽しみました。人同士の距離が近く、何でも話して笑い合えるストレスの少ない暮らしが、一番の命薬（ヌチグスイ）、長寿の源だったのかもしれない。



ブルーゾーンとは？

「ブルーゾーン」とは、世界で長寿者が多く暮らす地域のこと。ヨーロッパの研究者が、調査の中で長寿者の多いイタリア・サルデーニャ島の地域に青いマーカーで印をつけたので、こう呼ばれるようになりました。

2004年、アメリカのダン・ビュイトナーとナショナル・ジオグラフィックの「100歳人」の調査で、さらに4つの地域がブルーゾーンに選ばれました。そこに沖縄が入り、なんと大宜味村が取り上げられています。ビュイトナーの本では、ブルーゾーンには次の9つのルールがあるとしています。



ブルーゾーンのルール

- ルール1 適度な運動を続ける
- ルール2 腹八分で摂取カロリーを抑える
- ルール3 植物性食品を食べる
- ルール4 適度に赤ワインを飲む
- ルール5 はっきりした目的意識を持つ
- ルール6 人生をスローダウンする
- ルール7 信仰心を持つ
- ルール8 家族を最優先にする
- ルール9 人とつながる

大兼久なら...

- 畑仕事
- 昔ながらの食事
- 伝統の島野菜
- フーチバー（よもぎ）酒
- 朝から晩までよく働く暮らし
- 自然のリズムで生きる
- ご先祖様や自然への祈り
- 家族・親戚のつながりの濃さ
- ゆいまーる、共同体の絆

ゆんたくして笑っていれば
ストレスなんかないよ
それが長生きのヒケツかも
しれないねえ



自前の野菜たっぷりの
味噌汁が毎日の食事！
夜にちょっと島酒を飲んで、
「これがいきがいやんどー」



おばーとおじーが大兼久で語り継ぎたいこと

大兼久はな一、海と山に抱かれて、みんなで助け合いながら生きてきた集落さー。畑を耕し、海に出て魚をとり、川で水をもらい、足りないものは隣どうして分け合って暮らしてきた場所だよ。台風が来れば家を守り、日照りが続けば雨を待ち、良いことも苦しいことも、みんなで乗り越えてきたさー。ここには、おじーもおばーも、そのまた先の先祖も、たくさんの人の汗と祈りと笑いが積み重なっているさーね。

昔はな一、腹いっぱい食べられない時代もあったけれど、それでも子どもたちは海や川で遊び、笑い声は絶えなかったよ。大人たちは朝から晩まで働き、夜になれば公民館や売店の前でゆんたくして、今日も生きられたことを笑い合ったさー。家族だけじゃなく、集落みんなで子どもを育て、誰かが困れば自然と手を差し伸べる。それが当たり前の暮らしだったよー。

今は道路も良くなって、外から訪ねてくる人も増えてきたさー。長寿の村だと聞いて、どんな暮らしをしているのか見てみたいと、遠く県外や海外からも来てくれる。それは、わったー先祖が守ってきた暮らしが、今も価値あるものとして見られているということだから、ありがたいことでもあるさーね。

だけどな、ここは観光地じゃなくて、今も人が暮らしている家の前で、子や孫が遊び、年寄りがゆんたくしている場所さー。知らない人が急に家の前に立って写真を撮ったり、庭をのぞいたりすると、やっぱり落ち着かんさーね。静かに続けてきた暮らしが壊れてしまわないか、心配にもなるよー。

だからこれからは、この村の暮らしを守りながら、人を迎えるやり方をみんなで考えていきたいさー。案内する人と一緒に歩いてもらうとか、入っていい場所や時間を伝えるとか、この村のことを分かってもらいながら来てもらえたら嬉しいさー。来る人も、ただ見るだけじゃなく、この土地に流れてきた時間や、ここに生きてきた人の思いを少しでも感じてくれたら、それがいちばんありがたいさーね。

この風のせせらぎ、この海の色、この山の匂い、ゆっくり流れる時間は、先祖たちが守り、つないできた大兼久の宝だよ。わったーが受け取ったこの暮らしを、また子や孫、その先の世代へ渡していく。そのために、この大兼久のストーリーを、これからもみんなで語り継いでいきたいさーね。ここに生まれてよかった、ここに帰ってきたいと思える村を、これからも残していきたいさーね。



こうして広がった大兼久

01 初期の大兼久



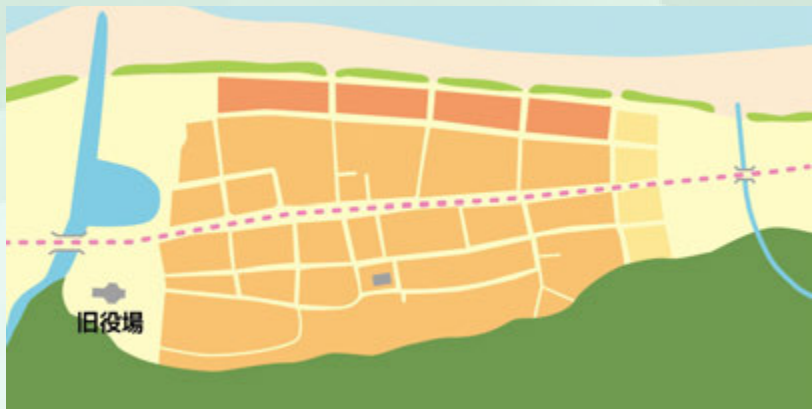
いつから人が住み始めたかはわからないが、300年前頃には数戸あったかもしれない。最初の集落は山側の一段高いところに作られた。最大1.5mの段差があり、その下は浜辺だった。大兼久川の河口は集落側に曲がっていた。

02 村が広がる(100-200年前?)



やがて家や畑が増えて、海側に集落が広がった。そこと浜辺との間には1.3m程の段差があった。新旧の集落の境目に中道ができ、のちの国道になった。

03 浜辺にも広がる(大正時代、約100年前)



さらに浜辺まで集落が広がった。大正の中頃に川の河口が真っ直ぐにされた。1923(大正12)年の台風で浜辺の家々が流された。1925(大正14)年に旧役場庁舎ができた。

04 現在の大兼久



その後も台風の大雨による山崩れなどがあった。1964(昭和39)年、元の砂浜の上に新しい国道58号が通され、70年代後半から離岸堤が作られて砂が再びたまっていった。新しい役場は1972(昭和47)年に作られ、2023(令和5)年に建て替えられた。

地域の情報リスト



大宜味村観光協会

大宜味村字津波95
TEL: 0980-50-5707
Mail: info@ogimi-kanko.com



NPO法人おおぎみ まるごとツーリズム協会

大宜味村字田港1357-18
TEL: 0980-44-1960



大兼久公民館

大宜味村字大兼久30



笑味の店 (完全予約制)

大宜味村字大兼久61
TEL・FAX: 0980-44-3220



大宜味村図書館 (旧議事堂)

大宜味村字大兼久157
TEL: 0980-44-3117



大宜味村役場 企画観光課

大宜味村字大兼久157
TEL: 0980-44-3007



参考資料

- 大兼久区, 1991. 『大兼久誌』
- 大宜味村, 2016. 『大宜味村史 シマジマ本編』
- 大宜味村, 2018. 『大宜味村史 民俗編』
- 大宜味村, 2022. 『大宜味村史 人と自然編』
- 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス <https://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>
- ダン・ビュイトナー, 2022. 『THE BLUE ZONES 2ND EDITION』祥伝社

あとかき

大兼久の暮らしに耳をすます

大兼久は、観光地ではなく、今も人々の暮らしが続いている集落です。

山と川と海に囲まれた自然の中で、人びとは助け合いながら働き、食べ、笑い、そして長い年月を生きてきました。

このストーリーブックづくりを通して改めて感じたのは、大兼久の魅力は特別な観光資源ではなく、日々の暮らしそのものの中にあるということです。川で水をいただくこと、海の恵みを分け合うこと、手仕事を受け継ぐこと、そしてゆいまるの心で支え合うこと。その一つ一つが、この土地ならではの物語となっています。

これから大兼久を訪れる方には、風景を見るだけでなく、ここで育まれてきた暮らしや想いにも少し耳を傾けていただければ幸いです。そして、地域の方々にとっては、この冊子が自分たちの暮らしの価値を再発見し、次の世代へ語り継ぐきっかけとなることを願っています。

このストーリーブックは完成形ではありません。これからも地域の声とともに、少しずつ書き加えられ、育っていくものです。大兼久の物語が、これからも人と人をつなぐ橋渡しとなることを願い、本冊子のあとかきといたします。

2026年3月

大宜味村観光協会 大崎 史丸(大宜味村 地域チームリーダー)

魅力を知るきっかけ

お互いを支え合い、良いと思ったことを共有し合い、共に笑い合い、幸せを分け合えることが自然体に生活の中に含まれている、それが私の思う大兼久の一番の魅力です。

このストーリーブックを作るにあたり大兼久の魅力を知るためのワークショップを開くことになり、そのことを地域の方に伝えると、皆が快く参加していただき、ワークショップが始まる前から大兼久の良さを感じていました。

地域の方はみな顔馴染みで、私も普段から一緒に集まり昔の遊びを話したり、次の部落作業の計画を話したり、その話を肴にお酒を飲んでこの大兼久で暮らしています。

このストーリーブックには見た人が大兼久の「魅力を知るきっかけ」として、外から来た人へ「魅力を伝える術」として、そして地域の先輩・後輩と「魅力を語り合う話の肴」として、大兼久を故郷とするすべての人へ届いてほしいと願っております。

2026年3月

大宜味村観光協会 米須 章仁

(大宜味村 地域チームサブリーダー)



大兼久ストーリーブック

おばーとおじーのしま語り

やんばる国立公園インタープリテーション全体計画 大宜味村編

発行 環境省沖縄奄美自然環境事務所

協力 新城 寛成／新城 弘子／大宜味 朝雄／奥島 菊江／金城 昭／金城 笑子／金城 健／

金城 弘也／金城 良一／黒田早苗／米須 聡子／孔 智賢／瑞慶山 清隆／平良 英一／平良 森雄／

デニス トルトーナ／藤田 元也／前田 英一／前田 元康／山城 孝子／山城 徹／山城 典哉／大宜味村

大宜味村 大崎 史丸／米須 章仁／前田 文彦／増田 耕平／山城 均
地域チーム

イラストレーター 安里 郁江

製作 やんばる国立公園インタープリテーション全体計画編集チーム

製作協力・監修 一般社団法人 日本インタープリテーション協会

